主日礼拝説教「立ち行かなくなる前に」

日本基督教団石神井教会　2018年2月25日

【旧約聖書日課】エレミヤ書　2章1～13節

1主の言葉がわたしに臨んだ。
2 行って、エルサレムの人々に呼びかけ、耳を傾けさせよ。主はこう言われる。
わたしは、あなたの若いときの真心、花嫁のときの愛
種蒔かれぬ地、荒れ野での従順を思い起こす。
3 イスラエルは主にささげられたもの、収穫の初穂であった。
それを食べる者はみな罰せられ、災いを被った、と主は言われる。
4 ヤコブの家よ、イスラエルの家のすべての部族よ、主の言葉を聞け。
5 主はこう言われる。
お前たちの先祖は、わたしにどんなおちどがあったので、遠く離れて行ったのか。
彼らは空しいものの後を追い、空しいものとなってしまった。
6 彼らは尋ねもしなかった。「主はどこにおられるのか、
わたしたちをエジプトの地から上らせ、
あの荒野、荒涼とした、穴だらけの地、乾ききった、
暗黒の地、だれひとりそこを通らず、人の住まない地に導かれた方は」と。
7 わたしは、お前たちを実り豊かな地に導き、味の良い果物を食べさせた。
ところが、お前たちはわたしの土地に入ると、そこを汚し
わたしが与えた土地を忌まわしいものに変えた。
8 祭司たちも尋ねなかった。「主はどこにおられるのか」と。
律法を教える人たちはわたしを理解せず、指導者たちはわたしに背き
預言者たちはバアルによって預言し、助けにならぬものの後を追った。
9 それゆえ、わたしはお前たちを、あらためて告発し、また、お前たちの子孫と争うと
主は言われる。
10 キティムの島々に渡って、尋ね、ケダルに人を送って、よく調べさせ
果たして、こんなことがあったかどうか確かめよ。
11 一体、どこの国が、神々を取り替えたことがあろうか、しかも、神でないものと。
ところが、わが民はおのが栄光を、助けにならぬものと取り替えた。
12 天よ、驚け、このことを、大いに、震えおののけ、と主は言われる。
13 まことに、わが民は二つの悪を行った。
生ける水の源であるわたしを捨てて、無用の水溜めを掘った。
水をためることのできない、こわれた水溜めを。

【福音書日課】マルコによる福音書　3章20～27節

20イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほど
であった。21身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変
になっている」と言われていたからである。22エルサレムから下って来た律法学者たちも、
「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い
出している」と言っていた。23そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語ら
れた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。24国が内輪で争えば、その国は成り
立たない。25家が内輪で争えば、その家は成り立たない。26同じように、サタンが内輪も
めして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。27また、まず強い人を縛り上げなければ、だ
れも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、
その家を略奪するものだ。

主イエスの家

「受難節（レント）」に入って、今年も週の半ばの「夕べの祈り」を始めています。少人数の集まりですが、与えられた祈りの式文に従って導かれるのは、わたしたち一人ひとりの悔い改めであるばかりでなく、わたしたちの共同体としての悔い改め、社会としての悔い改めでもあります。

教会は、初めの時代から、主のご復活を記念するイースターを祝ってきましたが、早い段階で、備えの期節として「受難節」を設けるようになったようです。この期節は、イースターに洗礼を受けることを志願した者の最後の準備の期間とされました。そして、そればかりでなく、一度は洗礼にあずかることによって教会共同体に加えられながら離れてしまっている者を、再び交わりのうちに迎え入れ、信仰の家族、主にある兄弟姉妹として受け入れ合う、赦しと和解のときともされてきたのです。

わたしたちにも身に覚えのあることですが、教会は、最初の時代から、一度は教会の交わりの中に共に生きることを喜んだ信仰の仲間が、何らかの理由で教会から足が遠のき、離れてしまう、ということに悩まされてきました。あるいは、使徒パウロが諸教会に宛てて記した多くの手紙で指摘しているとおり、教会の営みを共に続けながらも、互いの思いがすれ違い、衝突し、教会内部での争いが絶えないということに、悩まされてきました。それを、離れてしまった者の個人的な問題とし、あるいはトラブルを起こしている者の個人的な問題として切り捨ててしまえれば、簡単なことであったかもしれません。けれども、主イエスの御教えを受け継いだ弟子たちは、違ったことを教会共同体に問うたのです、「あなたたちは、内輪もめして争っているのか」、「あなたたちは、一人の小さな者をつまずかせておいて、平気な顔をしているのか」と。

受難節は、そのような主イエスの御教えを聞き直し、御声の響きわたるところとして教会をもう一度立て直すときとして大切にされてきたのです。別の言い方をすれば、主イエスをもう一度わたしたちの「家」にお迎えし、教会を御声の響きの聞こえる「主イエスの家」としていただこうとしてきたのです。

福音書の物語は、「**イエスが家に帰られると**」と始まっています。この家は、主イエスが生まれ育たれたナザレの町の家ではないようです。どうも、主イエスが宣教活動を始められて最初の弟子としたシモン・ペトロとアンデレ兄弟の家のようです。その家を、主イエスは、活動の拠点としていたのかもしれません。しかし、むしろ、ここには、ペトロの信仰の表れが反映しているのかもしれません。マルコ福音書は、ペトロの証言をもとにしてまとめられたと言われます。ペトロは、この福音書を記したマルコに、常々語っていたのかもしれません、「わたしの家は、主イエスのお住まいくださる家、主イエスの家になったのです」と。その家は、「ペトロの家」でした。あるいは、「ペトロの父の家」であったかもしれません。しかし、今や、ペトロもペトロの父も、その家の主人ではない、「わたしの家の主人は、主イエスになられたのです」と、ペトロが語っていたことが、ここに反映されているのではないでしょうか。

家に押し入られて

「わたしの家の主人は、主イエスです」と心から言えるならば、なんと幸いなことかと思います。実際には、わたしたちの多くは、信者ではない家族もいる家庭で「主イエスを主人」として何事につけ営むというのは、難しいことでしょう。いいえ、たとえ家族の皆が信者であっても、わたしたちは、「自分の家の主人を主イエスとする」ことは、容易いことではないのです。

それでも、わたしたちは、「主イエスを主人とする家」を与えられています。教会です。日々の生活を送る家がどのような状態であれ、わたしたちが導かれてきている教会は、「主イエスの家」なのです。わたしたちの信仰が生まれ、育まれた教会こそ、初めから主イエスのお住まいくださる家、「主イエスの家」に違いない。その「主イエスの家」であるはずの教会で、本当に、主イエスがお帰りになられるのを待ち、お迎えししているのか。この家の主人として、主イエスの御声の響きに、しっかりと耳を傾けているのか。教会が、そのような場となっているのか。

そのことを問われるのは、もちろん、わたしたち一人ひとりが主イエスを自分の家、自分の生活の場に迎える者とされることを目標としているからです。主イエスを主人とする家の住人、僕として、主人の思いにふさわしく日々ふるまうようになることを、願っているからです。

いいえ、本当は、わたしたち自身がそのことを目標にして願っている、とは言えないのかもしれません。わたしたちは、自分の家、自分の生活の場を、自分の考えでどうにかしたいのです。教会という、本来からして「主イエスの家」であるはずの場にあってさえ、主イエスが帰ってきてくださることではなく、別のことを期待してしまったりする。主イエスの御声の響きを聞き取ることよりも、自分たちの声を大きく響かせることを求めてしまったりする。

しかし、そんなわたしたちに代わって、願ってくださっている方があるのではないでしょうか。わたしたちを、「主イエスの家」に生きる者とならせようと、奮闘してくださっている方がいらっしゃるのではないでしょうか。

福音書の物語の中で、主イエスは、「**家が内輪で争えば、その家は成り立たない**」と、至極まっとうなことを言われました。そして、続けて、少し乱暴なたとえを語られています。「**まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。**」「家に押し入る」などと物騒な言い方がされていますが、これは、主イエスご自身のなさり方を、ユーモアたっぷりにお語りになられているのでしょう。主イエスは、わたしたちの家に、いわば押し入るようにして入って来られるというのです。わたしたちの中の強い人、わたしたち自身あるいはわたしたちを支配している者を、主イエスは縛り上げてしまわれて、わたしたちの家をご自分のものとなさる、というのです。それほどまでに、主イエスは真剣に、わたしたちに向かってこられるのです。わたしたちの拒む思いを押さえつけてでも、主イエスは、わたしたちの家のただ中においでになられる、というのです。

主イエスの身内こそが…

主イエスが、このような少し乱暴なたとえでご自分のことをおっしゃられているとは、考えたくないかもしれません。主イエスは愛のお方で、いつも優しく穏やかで、午後の陽だまりのように暖かい存在であってほしいと、わたしたちは願っているからです。けれども、福音書の伝える主イエスは、決してそれだけのお方ではない。むしろ、とても激しいお方で、ときに厳しい論争をされることもあれば、憤りを示されることもあるのです。しかし、そのようにしてでも、主イエスは、一人ひとりの中に押し入るようにして、入って来られたのではないでしょうか。だからこそ、どこか煮え切らないわたしたちでも、「主イエスの家」である教会に連なる者としていただけたのではないでしょうか。主イエスと結びつく者、神の子と呼ばれる者とならせていただくことになったのではないでしょうか。

わたしたちが、主の家である教会に連なり、主イエスに従う者とならせていただいているのは、不思議なことです。本当のところ、わたしたち自身でどうにかできることではない、ただ、主イエスが行動を起こしてくださっていることによって導かれていることなのだと思うのです。

そうであればこそ、用心しなければいけません。いつの間にか主客が転倒してしまうことがあるからです。主イエスを自分にとって大切な身内同然の存在と思いながらも、自分が従うべき主人としてではなく、自分に都合よく従ってくれる存在に、置き換えてしまうことがあるのです。主イエスを、「主の家」から引っ張り出して、「自分の家」に押し込もうとしてしまうのです。いつのまにか、「主の家」を「自分の家」にしてしまおうとするのです。

福音書の物語で、主イエスのことを取り押さえに来た「**身内の人たち**」が描かれています。後に続く個所を見ると、この人たちが、**主イエスの母と兄弟たち**（31節）であったことが分かります。まさに主イエスの家の者たちが、ここでは、主イエスを「主の家」から引っ張り出そうとしているのです。

「これは、わたしたち主の教会に身内として連なる者の姿だ」と、マルコ福音書は告げているのではないでしょうか。わたしたちは、主イエスの家に連なる者とされながら、主の家にいることを望まないことがあるのです。いいえ、それどころか、主の家に押し入って、主イエスを縛り上げてしまって、その家を「自分の家」にしてしまおうとさえする者なのでしょう。

だからこそ、主イエスは、事実、縛り上げられなければならなかったのです。縛り上げられて、十字架につけられなければならなかったのです。ご自分の家を、人の手に渡し、わたしたちのものとすることを、お許しにならなければならなかったのです。しかし、主イエスは、そのようにしてでも、わたしたちにご自分の家をお与えくださいました。ご自分が主人として君臨することによってではなく、ご自分を僕であるわたしたちにお与えくださることによって、まことに、ここを「主の御心の行われる家」としてくださいました。それは、わたしたちも、いずれ主と同じように振る舞い、生きるようになるためなのです。